

## 古代伊勢の太陽神小考

洪 聖 牧

一

日本の太陽神といえ、皇祖神天照大神（以下アマテラス）とアマテラスの鎮座する伊勢神宮を思い浮かべるが、伊勢地方はアマテラス登場以前から一種の太陽神崇拜の聖地であつたらしい。大和からみて東に当たる伊勢の地は、多くの先学によつて説かれてきたように、その地理的要件から太陽信仰の盛んな地域であつた。

津田左右吉氏は伊勢が太陽神を祭るところになつたのは、廣い地域としてのイセが、ヤマトから考へて東の方、即ち日の出る方、の陸地のはてに當つてゐる、いひかへると日の出る方に向つてゐる海邊の土地である、からであらう。この意味に於いてイセは、地理的にはヒムカと同じや

うにヤマト人には思はれたのであらう、と推定した<sup>(1)</sup>。また直木孝次郎氏は、伊勢神宮に古くから設けられている風雨を鎮め五穀豊穰を祈る日祈内人の職掌などの存在をあげて、伊勢神宮がやはりもともと自然神格としての太陽神の社であつた痕跡を窺えると述べている<sup>(2)</sup>。西郷信綱氏も、太陽神に関する物語の中で、特に伊勢の色彩が強いのは、端的に伊勢が大和からほほ東に当たつてゐるので、文字通り日出づる国であり、朝日のただ刺す国であつたからである<sup>(3)</sup>、と説く。さらに伊勢の古い風俗として、神島のゲーダー祭や、二見ヶ浦の輪じめ縄などのような、太陽をシンボライズする儀礼の存在からも伊勢の太陽崇拜を推測でき

る。このように、伊勢を太陽神崇拜の聖地として想定すると

アマテラス登場以前に伊勢に太陽神が存在したとしても不思議ではない。伊勢の地で太陽神の属性を一面に持つ神として猿田彦（以下サルタビコ）と伊勢津彦（以下イセツヒコ）をあげられる。また、この太陽の地の伊勢に目を向けた大和朝廷は、皇祖神アマテラス成立以前の伊勢の太陽神を伊勢に坐す大なる神、すなわち伊勢大神（以下イセノオホカミ）と称したと思われる。それは神功皇后に新羅征伐の神託を下した後、天武天皇にいたるまで「アマテラス」は記紀にまったくその名が見えないからである。

そこで本稿では、伊勢にその勢力を伸ばした天皇家によって皇祖神アマテラスに変換された伊勢の太陽神の原像を、記紀及び風土記に伝わるサルタビコとイセツヒコ、そしてイセノオホカミの伝承から検討し、考察していきたい。

## 二

アマテラス以前の伊勢の古い太陽神と関連し、『古事記』と『日本書紀』の天孫降臨神話に登場する猿の太陽神サルタビコの伝承がある。この神は、神名自体すらいまだに定説を見ない、複雑かつ難解な神である。その原因は記紀に記されている伝承に、サルタビコの顔姿に対する詳細な描写が存在し、この神が太陽神をはじめ道祖神、性神、猿神、

海神といった複雑な霊格をかねそなえているからである。

多くの霊格をもっているサルタビコについて、松前健、筑紫申真氏などは、この神を伊勢地方の太陽神であるうと説いている。松前健氏は、サルタビコが伊勢志摩地方の海人達の有する、猿形の原始的な太陽神格であったのであるう、と推定した<sup>(4)</sup>。また筑紫申真氏は、猿田彦は南伊勢で信仰された太陽霊であり、田植えのころ田に降臨して稲の生育を見守る神として祀られた。この神を祀ったのは宇治土公氏の巫女であるウズメすなわち猿女であった、と述べている<sup>(5)</sup>。

記紀に伝えるサルタビコの伝承を検討していくと、この神が太陽神の霊格を持つことは確かである。『古事記』の記述によれば、天孫降臨の際に天の八衢にいて、上は高天原を照らし、下は葦原中国を照らすとあるように天地を照らしており、また『日本書紀』には、太陽神を祀る象徴物である八咫鏡のような眼を持つことから、太陽神の霊格をもっていることがわかる。

(一)爾に日子番能迹迹藝命、天降りまさむとする時に、天の八衢<sup>やちまた</sup>に居て、上は高天の原を光し、下は葦原中国<sup>あしはら</sup>を光す神、是に有り。故爾に天照大御神、高木神の命<sup>みこと</sup>以ちて、天宇受賣神に詔りたまひしく、「汝は手弱女人<sup>たわやめ</sup>

にはあれども、伊牟迦布神と面勝つ神なり。故、専ら汝往きて問はむは、『吾が御子の天降り爲る道を、誰ぞ如此て居る。』ととへ。』とのりたまひき。故、問ひ賜ふ時に、答へ白ししく、『僕は國つ神、名は猿田毘古神ぞ。出で居る所以は、天つ神の御子天降り坐すと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむとして、參向へ侍ふぞ。』とまをしき。

〔古事記〕天孫降臨

(二) 已にして降りまさむとする間に、先驅の者還りて白さく、「一」の神有りて、天八達之衢に居り。其の鼻の長さ七咫、背の長さ七尺餘り。當に七尋と言ふべし。且口尻明り耀れり。眼は八咫鏡の如くして、てりかかやけることあかがち 絶然 赤酸醬に似れり」とまうす。

〔日本書紀〕一書第一

サルタビコの眼が八咫鏡にたとえられていることは重要である。太陽神アマテラスは、自分の御魂として八咫鏡をホノニニギに与え、祀ることを指示している。このことから八咫鏡が太陽神を象徴する呪物または祭具であることは確かである。

爾に天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命、併せて五伴緒を支ち加へて、天降したまひき。是に其の遠岐斯八尺の勾璽、鏡、

及草那藝劍、亦常世思金神、手力男神、天石門別神を副へ賜ひて、詔りたまひしく、「此れの鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拜くが如伊都岐奉れ。次に思金神は、前の事を取り持ちて、政爲よ。」とのりたまひき。

〔古事記〕天孫降臨

サルタビコがこうした八咫鏡のような眼をもち、天地を照らしているという記述は、この神の太陽神としての姿をよく示している。またサルタビコを祭神として祀る伊勢の二見ヶ浦の興玉神社の信仰からも、この神の太陽神としての性格が確認できる。二見ヶ浦の興玉神社では、海中から突き出た二つの巨岩、雄岩と雌岩に注連縄を張り、その間の水平線からさし昇ってくる朝日を礼拝するという信仰が伝わっているという。興玉とは沖魂、すなわち海上より立ち昇る光の玉である朝日に対してつけられた名である。そして、その沖合には、猿田毘古大神が来臨し、立ち現れたとされる神石が残っている。鎌田東二氏は、これらのことからサルタビコに旧き古の太陽神の面影が宿っているというの、そこに理由がある、と述べている。

さらに、サルタビコの伝承を語るに欠かせないのが、アメノウズメである。天の岩戸神話や天孫降臨神話に活躍し、サルタビコを伊勢の五十鈴川まで送り届け、またその名を

負うと伝えられている、猿女君の祖神アメノウズメは、本来伊勢地方の古い太陽神サルタビコを祀る巫女の神格化であったのである。松前健氏は、最初の両者の出逢いの際に、アメノウズメがサルタビコに対して行ったワザヤキは、性的所作を連想させる神事儀礼であるから、この伝承は神とこれに神妻として仕える巫女の話であると述べ、猿女は元来サルタビコに神妻として仕える巫女であり、司霊者であったと指摘している。

『日本書紀』によれば、アメノウズメは天の岩戸の前で、アマテラスを呼び出すため「天の石屋戸に氣伏せて踏み登り呂許志、神懸り爲て、胸乳を掛き出で裳緒を番登に忍し垂れき。」といった儀礼を行う。これはアマテラスを祀る意味があったと思われるが、アメノウズメは天孫降臨に際して「及ち其の胸乳を露にかきいでて、裳帯を臍の下に抑れて、咲噓ひて向きて立つ」といった、天の岩戸の前で行ったのとほぼ同じ行為をサルタビコに対しても行っている。つまり巫女としてのアメノウズメの同じ儀礼が、アマテラスに対してもサルタビコに対しても行われていることになる。これは、サルタビコとアマテラスに共通する性格、すなわち太陽神としての性格があったからであると思われる。またこうした呪術的儀礼は、もともとこの猿女

君の巫女が家伝として伝えていた「太陽神復活」のための鎮魂儀礼であり、皇祖神アマテラスに対してではなく、伊勢の古い太陽神サルタビコに対する儀礼であったと思われる。

サルタビコが太陽神アマテラスの孫ホノニニギの降臨を天の八衢で迎え、また降臨地に案内する神話は、猿と太陽神の関係および猿を太陽神の使いであるとする信仰に基づいていると考えられるが、サルタビコもまた、本来は太陽神そのものであったといえよう。

### 三

さて太陽神の聖地である伊勢には、前述した通りの猿の太陽神サルタビコと同様、天皇家の太陽神アマテラス以前に他の太陽神が存在したと思われる。その太陽神とはイセツヒコである。

『風土記』には、伊勢の地方神といえる古い太陽神イセツヒコについて伝えている。イセツヒコについて、仙覚の『万葉抄』や『釈日本紀』、『日本書紀私見聞』などに引く『伊勢国風土記』逸文によれば、カムヤマトイハレビコが東征してくる際、天日別命（以下アメノヒワケノミコト）に命じ、イセツヒコの治める国を献じるようにすすめた。イセツヒ

コはこれを拒んだゆえに、アメノヒワケノミコトが兵を發して殺そうとする。すると國を獻上することに同意し、大風を起して浪を吹き上げ、浪に乗って東方に去る。

其の邑に神あり、名を伊勢津彦と曰へり。天日別命、問ひけらく、「汝の國を天孫に獻らむや」といへば、答へけらく、「吾、此の國を覓ぎて居住むこと日久し。命を聞き敢へじ」とまをしき。天日別命、兵を發して其の神を戮さむとしき。時に、畏み伏して啓しけらく、「吾が國は悉に天孫に獻らむ。吾は敢へて居らじ」とまをしき。天日別命、問ひけらく、「汝の去らむ時は、何を以ちてか驗と爲さむ」といへば、啓しけらく、「吾は今夜を以ちて、八風を起して海水を吹き、波浪に乗りて、東に入らむ。此は則ち吾が却る由なり」とまをしき。天日別命、兵を整へて、窺ふに、中夜に及る比、大風四もに起りて波瀾を扇擧げ、光耀きて日の如く、陸も海も共に朗かに、遂に波に乗りて、東にゆきき。

(風土記逸文「伊勢國風土記」)

イセツヒコは自分の退去する証拠として、今夜八風を起して海の水を吹き、波浪に乗って東に去ると約束する。その退去の光景について、真夜中頃になって台風が四方から

起り、うち上げた波しぶきが光り輝いて、まるで昼のよう、急に陸地も海も明るくなり、波に乗って東に去ったということである。

松前健氏はイセツヒコについて、この日のごとく輝きつ海を渡る神は、恐らく原初的には太陽的性格の神なのであろう、と述べている。このイセツヒコは松前氏も述べているように、「うち上げた波しぶきが光り輝いて、まるで昼のよう、急に陸地も海も明るくなった」という記述から、太陽神の性格をもっているとみていいだろう。

また「八風を起して海の水を吹き、波浪に乗る」ということは、伊勢が海に接しており、海人たちの活動した地域であったということを考慮すると、この神が太陽神でありながら、海と関係の深い風の神または暴風の神としての靈格も兼ねそなえていたと考えられる。

『日本書紀』に、イザナキ・イザナミの二神が日神を生み出したのち、天柱で天上に送りあげたと記されている。この天柱について、柱は神の降下してくる憑依であるから、それをたどって逆に天に登らせたとする解釈(天系)や、神靈の宿る柱で、天につなぐ天橋立とも通じるものである(新全集)と説かれている。ところが『延喜式祝詞』の龍田風神祭に、風神のことを天乃御柱乃命・國

乃御柱乃命と記されており、風が天地をつなぐ神霊の乗り物でもあったと思われる。

(一) 是に、共に日の神を生みまつります。大日靈貴と號す。大日靈貴、此をば保比屢咩能武と云ふ。靈の音は力丁反。一書に云はく、天照大神といふ。一書に云はく、天照大日靈尊といふ。此の子、光華明彩しくして、六合の内に照り徹る。故、二の神喜びて曰はく、「吾が息多ありと雖も、未だ若此靈に異しき兒有らず。久しく此の國に留めまつるべからず。自づから當に早に天に送りて、授くるに天上の事を以てすべし」とのたまふ。是の時に、天地、相去ること未だ遠からず。故、天柱を以て、天上に擧ぐ。

〔日本書紀〕神代上・第四段・一書第十

(二) 是以皇御孫命大御夢爾悟奉久、天下乃公民乃作物乎、惡風荒水爾相都都、不成傷波、我御名者天乃御柱乃命・國乃御柱乃命止御名者悟奉氏、吾前爾奉幣帛者、御服者明妙・照妙 和妙・荒妙・五色乃物・楯・戈・御馬爾御鞍具氏、品品乃幣帛備氏、吾宮者朝日乃日向處、夕日乃日隱處乃龍田能立野乃小野爾吾宮波定奉氏、吾前乎稱辭竟奉者、天下乃公民乃作物者、五穀乎始氏、草乃片葉爾至万氏、成幸閑奉奉止悟奉支。

〔延喜式〕卷八・神祇八・祝詞・龍田風神祭

『日本書紀』と『延喜式祝詞』の記事からみると、日神は風を乗り物にしており、したがって風神は日神の眷属神であり御者であったかもしれない。イセツヒコが太陽神と風神の靈格を兼ね備えたのもあながち無関係ではないだろう。伊勢の風神は風宮という社に祀られ、伊勢神宮の内宮と外宮とにそれぞれ一つずつ末社として置かれている。風宮では古くから毎年七月に日祈内人によつて風祭を行い、風雨を鎮め五穀豊穰を祈つた。この風宮は弘安の役に神風を吹かせた功績により、社号を改めて宮号を授けられ、宮幣にあずかるようになる。このように、風宮が伊勢神宮の末社として重んじられたことは、太陽神と風神との關係をよく示している。

さて風土記によれば、伊勢国の名はアマテラスから由来するものでなく、イセツヒコから由来すると伝える。

古語に、神風の伊勢の國、常世の浪寄する國と云へるは、蓋しくは此れ、これを謂ふなり。(伊勢津彦の神は、近く信濃の國に住ましむ。) 天日別命、此の國を懐け柔して、天皇に復まをしき。天皇、大く欲びて、詔りたまひしく、「國は宜しく國神の名を取りて、伊勢と號けよ」とのりたまひて、即て、天日別命の

封地トウチの國と爲し、宅地ヤクチを大倭オホヤマトの耳梨ミミナシの村に賜ひき。

(風土記逸文『伊勢国風土記』)

アメノヒワケノミコトが伊勢の国を平定し、天皇に報告したところ、天皇は大變喜び、この国の名前を国つ神のイセツヒコの名前から取り、伊勢の国と命名し、アメノヒワケノミコトの領地としたことである。

伊勢の国名について、『日本書紀私見聞』に引く『伊勢国風土記』の別の逸文によれば、伊勢という名は、伊賀の安志の社に坐す出雲の神の子なる出雲建子命、又の名を伊勢都彦命、または櫛玉命という神の名から取られたものである。この神が昔、石で城を造って根城としていたから、そう名付けられた。ところが阿部志彦という神がこれを奪おうとして攻めてきたが、勝たずに帰去つたと伝える。

伊勢の國の風土記に云はく、伊勢と云ふは、伊賀いの安志あの社やしろに坐いす神かみ、出雲いづもの神かみの子こ、出雲建子命いづもたけのみこと、又の名は伊勢都彦命いせつひこのみこと、又の名は櫛玉命うしたまのみことなり。此の神の神、石もて城きを造りて此こゝに坐いしき。ここに、阿倍志彦あへしひこの神、來奪きうばひけれど、勝かたずして還かへり却かへりき。因よりて名なと爲なす。

(風土記逸文『伊勢国風土記』)

この伝承から、イセツヒコは古くから伊賀の地方でも崇拜されていた神であり、おそらく大きな石積、石壇の上に

祀られていたと思われる。

イセツヒコの崇拜は、伊勢や加賀だけでなく、他の地方でも存在したらしい。『播磨国風土記』損保郡伊勢野条によれば、人々がこの地に部落をつくろうとしてみようまいかなかったが、伊和大神の御子の伊勢都比古命・伊勢都比売命を祀つてからは里を成すことができ、すなわちこの神の名から伊勢野・伊勢川と名づけたと伝える。

伊勢野と名づくる所以は、此の野に人の家ある毎に、靜安いせきことを得えず。ここに、衣縫きぬぬいの猪手あひて・漢人あやひとの刀良等やしろが祖おや、此處こゝに居をらむとして、社やしろを山本やまもとに立てて敬あやまひ祭りき。山の岑みねに在いす神は、伊和いの大神おほのかみのみ子こ、伊勢都比古命いせつひこのみこと・伊勢都比賣命いせつひめのみことなり。此これより以後のち、家々いへいへ靜安やすくして、遂つひに里さとを成なすことを得えたり。即すなはち伊勢いせと號なづく。

伊勢川 神いせがはに因よりて名なと爲なす。

(『播磨国風土記』損保郡伊勢野)

伊和大神は宍禾市一宮町伊和を本居とする氏族の奉ずる、損保・神前二郡などからさらに広い信仰圏をもつ神である。イセツヒコの崇拜が、播磨の伊和大神の信仰圏にまで入りこんだため、その神の御子とされたと考えられる。

このようにイセツヒコは伊勢だけでなく、他の地方でも

尊崇されていたと思われるが、ある時期伊勢にその勢力を伸ばした大和朝廷によって退去することになる。そしてイセツヒコを退けたアメノヒワケノミコトは、伊勢朝臣や伊勢外宮の祠官度会氏の祖神であり、神道五部書や後世の神宮関係の諸書において重んじられている神である。イセツヒコがアメノヒワケノミコトに伊勢の地を譲って退去する伝承は、この伊勢の古い太陽神イセツヒコの信仰が、度会氏などの、新しい大和の勢力によって屈服させられたという史実を、ある程度反映させていると考えられる。またこれは、新しく浮上する大和の太陽神と、それによって退いていく伊勢の古い太陽神とにかかわる信仰の変遷を示唆しているといえよう。伊勢の太陽神は、イセツヒコの伝承から分かるように、もともとアマテラス、すなわち女神ではなくイセツヒコという男神であったと思われる。

#### 四

さて、アマテラスの登場する前に伊勢に存在した古い太陽神としてイセノオホカミという神が浮かび上がる。この神の解釈について、岩波古典大系は「天照大神は伊勢に祭つてあるので伊勢大神とも書く」とし、小学館新編全集では伊勢大神の祠を「伊勢神宮の内宮」として、イセノオホ

カミとアマテラスとを同じ神と解釈する。これが現在の定説である。ところが『日本書紀』を仔細に検討すると、「イセノオホカミ」と「アマテラス」とが微妙に異なつて書き分けられており、イセノオホカミとアマテラスとは、別系統のものであると考えられる。

記紀において、神が二つ以上の名をもつ時や、別名であらわれる際には割注や異伝、亦の名というかたちでその名が記されており、アマテラスも例外ではない。

(一) 是に、共に日の神を生みまつります。大日靈貴と號す。大日靈貴、此をば於保比屢能武智と云ふ。靈の音は力丁かて反。一書に云はく、天照大神といふ。一書に云はく、天照大日靈尊といふ。

(二) 爾に其の矢、雉の胸より通りて、逆さかしまに射上いあげらえて、天安河の河原に坐す天照大御神、高木神たかぎのみことの御所に逮いたりき。是の高木神は、高御産巢日神の別の名ぞ。

(『古事記』天若日子)

つまりイセノオホカミとアマテラスとが同一神であれば、アマテラスの出現時や伊勢鎮座後に別名として記されるはずである。さらに天照大神という、いかにも太陽神たる神名に対し、伊勢大神は単なる伊勢地方の地方神のような神名であり、神名だけでは太陽神たる神格を有している

とは考えがたい。やはり別の神ととらえるべきであろう。

『日本書紀』にアマテラスの名が現れるのは、神代巻を別とすれば、神武天皇前期戊午六月丁巳条の、熊野で危機に直面した神武天皇を救う場面である。

時に、彼處に人有り。號を熊野の高倉下と曰ふ。忽に夜夢みらく、天照大神、武甕雷神に謂りて曰はく、「夫れ葦原中國は猶聞喧擾之響焉。聞喧擾之響焉、此をば左擲寛利奈離と云ふ。汝更往きて征て」とのたまふ。

〔日本書紀〕神武天皇即位前紀戊午年六月  
神武紀をはじめとして、崇神紀、垂仁紀、および神功皇后紀のアマテラスが、神代巻のアマテラスと同一であることはいうまでもない。なぜならアマテラスが天皇の日本統治の根源としての役割を担う神として具体的に機能し活動しているからである。

このように神武天皇を助けたアマテラスは、その後神功皇后の新羅征伐にいたるまで、さまざまな神託を下し天皇家の皇祖神として活躍する。ところが、アマテラスに関する記事は、神功紀以後、天武紀元年条にいたるまで姿をみせず、その代わりにイセノオホカミが現われ、天皇家の祭祀を受けている。したがって太陽神としてのアマテラスが、アマテラスに代表されるようになる以前の事態を知るため

に、「アマテラス」の伊勢鎮座と「イセノオホカミ」の出現に関する記事を考察する必要がある。

まず『日本書紀』によれば、アマテラスは第十代崇神天皇時代まで、宮中で天皇自らの手によって祀られていたという。ところが国内に疫病が広まって国の民の半数までが死亡し、民の流離、反乱などが起つたため、皇女トヨスキイリビメに大神の御霊代を託して大和の笠縫邑に祀つたといひ、ここにアマテラスの名が現れる。この大和、笠縫といふのは奈良縣磯城郡の三輪山の北麓の霊地、今日の檜原神社の社地である。

六年に、百姓流離へぬ。或いは背叛くもの有り。其の勢、徳を以て治めむこと難し。是を以て、晨に興き夕までにりて、神祇に請罪る。是より先に、天照大神・倭大國魂、二の神を、天皇の大殿の内に並祭る。然して其の神の勢を畏りて、共に住みたまふに安からず。故、天照大神を以ては、豊鍬入姫命に託けまつりて、倭の笠縫邑に祭る。仍りて磯堅城の神籬神籬、此をば比奈呂岐と云ふ。を立つ。亦、日本大國魂神を以ては、淳名城入姫命に託けて祭らしむ。

〔日本書紀〕崇神天皇六年)

それから垂仁天皇二十五年三月条に、アマテラスの鎮座する土地を求め、ヤマトヒメが近江、美濃を巡り、伊勢に到った時アマテラスが「神風の伊勢の国は常世の浪の重浪帰する国なり。傍国可憐国なり。この国に居らむと欲す。」といったとある。

三月の丁亥の朔丙申に、天照大神を豊鍬入姫命より離ちまつりて、倭姫命に託けたまふ。爰に倭姫命、大神を鎮め坐させむ處を求めて、菟田の笹幡に詣る。笹、此をば佐佐と云ふ。更に還りて近江國に入りて、東美濃を廻りて、伊勢國に到る。時に天照大神、倭姫命に誨へて曰はく、「是の神風の伊勢國は、常世の浪の重浪歸する國なり。傍國の可憐し國なり。是の國に居らむと欲ふ」とのたまふ。故、大神の教の隨に、其の祠を伊勢國に立てたまふ。因りて齋宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります處なり。〔日本書紀〕垂仁天皇二十五年三月

これはアマテラスが自分の意志を伝えた言葉である。このようにアマテラスの言葉として、アマテラスの伊勢鎮座の由来、また齋宮の始原が語られている。これにより、五十鈴川の川上に齋宮を建てたのが伊勢神宮の創祀とされ

る。アマテラスの伊勢鎮座について、『倭姫命世記』にも同じ記事が見え、その時の儀式とアマテラスへの賛辞が詳細に伝えられている。

さらに景行天皇二十年二月条の「二十年の春二月の辛巳の朔甲申に、五百野皇女を遣したまひて、天照大神を祭らしむ。」という記事は、前に引用した垂仁紀の「故、大神の教の隨に、其の祠を伊勢國に立てたまふ。因りて齋宮を五十鈴の川上に興つ。」の記事を受けている。ついで記紀の神功皇后の伝承にも、神功皇后に神懸かりして新羅征討を教示した神としてアマテラスの名があげられる。

これに対し、「イセノオホカミ」の初見は、『日本書紀』雄略天皇元年三月三日の記事に始めて登場し、用明天皇朝まで日神として皇女によって祀られたと伝えられる。その記事を次に挙げる。

(1) 是の月に、三の妃を立つ。元妃葛城圓大臣の女を韓媛と曰ふ。白髮武廣國押稚日本根子天皇と稚足姫皇女更の名は、栲幡姫皇女。とを、生めり。是の皇女、伊勢大神の祠に侍り。

(2) 次に、息長眞手王の女を麻績娘と曰ふ。

荳角皇女を生めり。荳角、此をば娑佐礙といふ。是  
伊勢大神の祠に侍り。〔日本書紀〕繼体天皇元年三月

(3) 其の一の大兄皇子と曰す。是を橘豊日尊と  
す。其の二を磐隈皇女と曰す。更の名は夢皇女。  
初め伊勢大神に侍へ祀る。後に皇子茨城に奸されたる  
に坐りて解けぬ。〔日本書紀〕欽明天皇二年三月

(4) 七年の春二月の戊辰の朔壬申に、菟道皇女  
を以て、伊勢の祠に侍らしむ。即ち池邊皇子に奸さ  
れぬ。事顯れて解けぬ。〔日本書紀〕敏達天皇七年三月

(5) 壬申に、詔して曰へらく、云云。  
酢香手姫皇女を以て、伊勢神宮に拜して、日神の  
祠に奉らしむ。是の皇女、此の天皇の時より、炊屋姫  
天皇の世に逮ぶまでに、日神の祠に奉る。自ら葛城に退きて  
薨せましぬ。炊屋姫天皇の紀に見ゆ。或本に云はく、三十七年の  
間、日神の祀に奉る。自ら退きて薨せましぬといふ。

〔日本書紀〕用明天皇即位前紀九月

(6) 葛城直磐村が女廣子、一の男、一の女  
を生めり。男をば麻呂子皇子と曰す。此當麻公の先な  
り。女をば酢香手姫皇と曰す。三代を歴て日神に  
奉る。

〔日本書紀〕用明天皇元年正月

このような『日本書紀』の記事に即していえば、皇女が

イセノオホカミに侍り祀る慣行は、五世紀中頃から行われ  
たと考へる。そして六世紀後半にはイセノオホカミが「日  
神」と呼ばれていたことが推測される。

また『日本書紀』の皇極天皇四年正月条の記事によれば、  
猿がイセノオホカミの使いであると伝えられている。すな  
わち、丘の峯、河辺、あるいは宮寺の間に数多くの猿(猿  
の嘯く声が聞こえ、近づいて見てもその姿は見えず、声の  
み聞こえた。時の人は「此は是、伊勢大神の使なり」とい  
つたとある。

四年の春正月に、或いは阜嶺に、或いは河邊に、或い  
は宮寺の間に、遙に見るに物有り。而して猿  
の吟を聴く。或いは一十許、或いは二十許、就  
きて視れば、物便ち見えずして、尚鳴き嘯く響聞ゆ。  
其の身を觀ること獲るに能はず。舊本に云はく、是歲、京  
を難波に移す。而して板蓋宮の墟と爲らむ兆なりといふ。時  
人の曰はく、「此は是、伊勢大神の使なり」といふ。

〔日本書紀〕皇極天皇四年正月

前述したように、伊勢地方には古い太陽神として、猿の  
太陽神サルタビコが存在した。古い動物神が人格神に入れ  
かわりするにつれて、動物神はその靈格を人格神に吸収さ  
れ、その神の眷属神ないし使いになることは普遍的現象で

ある。古代日本において、特に猿は神の使いとして広く信じられてきた<sup>⑩</sup>と思われる。サルタビコが日の御子の降臨を迎え、また降臨地に案内する神話は、猿と太陽神の関係および猿を太陽神の使いであるとする信仰に基づいていると考えられる。皇極紀の、猿がイセノオホカミの使いとして伝えられていることから、この神の太陽神としての靈格を窺える。ただし注目すべきことは、イセノオホカミが天皇家にとって特別な神であったことは確かであるが、この段階にもまだアマテラスという名称で呼ばれてはいないことである。

古代日本の日神と関連し、中国の『隋書』の「倭国伝」の記事によれば、推古天皇朝、隋に派遣した使者が高祖の問いに対し、天皇は「天」を以て兄とし、「日」を以て弟となす。天未だ明けざる時、出でて政を聴き跣踏して座し、日出ればすなわち理務を停め、弟に委ねん、と答えたという。

開皇二十年倭王姓阿每字多利思比孤號阿輩鷄彌遣使詣  
闕 上令所司訪其風俗 使者言 倭王以天爲兄以日爲  
弟 天未明時出聽政跣踏日出便停理務云委我弟

（『隋書』八十一・倭国伝）

これは中国の「天子」という思想に対し、日本の天皇は

「天弟」ないし「日兄」であるという対抗意識からあらわされたものと説かれているが、むしろ注意すべきところは、推古朝まで日神はあっても、アマテラスの觀念はないという点である。さらに日神は天皇の「弟」とされ、すなわち「女神」ではないという点も見逃せない。

大和の天皇家が皇祖神アマテラスを伊勢の太陽神として成立させた時期は不明である。先に引用した『日本書紀』崇神天皇六年の記事によれば、崇神朝にそれまで代々大神の御靈代としての神鏡を、天皇が同殿、共床において祀っていたのを、神威を恐れ、宮殿の外に出し、大和の笠縫邑に遷し、皇女のトヨスキリビメを御杖代として奉仕させたという。この伝承通りに、アマテラスが皇室内に祀られていたものを遷したとすれば、推古朝の『隋書』の「倭国伝」の当該記事にアマテラスの名が出てきたはずで、すくなくとも「弟」、即ち「男神」ではなかったはずである。したがって推古朝の『隋書』の「倭国伝」の当該記事と崇神朝のアマテラスの遷宮記事とは矛盾しており、崇神朝のアマテラスの記事は後代の觀念が投影されたといえる。

しかも『日本書紀』の雄略天皇条より天武天皇条までの間において、アマテラスの名を見出すことはできないし、天皇の伊勢參拜もなかったのである。天皇の伊勢行幸など

は、七世紀後半の持統天皇のときまでは、まったくなかった。このように、皇女がイセノオホカミを祀るようになったのは五世紀半ばかりで、六世紀後半には太陽神として祀られるようになったと推測できよう。

さて大和朝廷の、イセノオホカミ像の変遷について、注目すべき資料が『日本書紀』持統天皇六年の記事である。持統紀によれば、持統天皇が伊勢に行幸した行路の諸国の調役を免除したが、渡会・多気の二神郡の場合、赤引糸が神宮の祭料として欠かせないため、イセノオホカミが天皇に適用除外を奏したと記されている。

丁未ひのとのおひのひに、伊勢大神いせのおほかみ、天皇に奏して曰まうしたまはく、「伊勢國いせのくにの今年ことしの調役えつきゆる免ゆるしたまへり。然しかれども其ふたの二つの神郡かみのほりより輸あからひきのいとみぞあまりいつほりすべき、赤引糸あからひきのいとみぞあまりいつほり參拾伍斤まじりは、來年こむとしに、當まさに其そのの代しろを折おぐべし」とまうしたまふ。

〔日本書紀〕持統天皇六年五月

この記事について岡田精司氏は、赤引糸の上納は神戸の民の義務であり、調の形をとって納めたものであったが、三月十七日の詔によって調役免除（『日本書紀』持統天皇六年三月十七日記事、筆者注<sup>12</sup>）となれば、調としての赤引糸の貢納は当然拒否できるわけである。ところがそれでは月次祭や神衣祭に欠息を生じることになる。おそらく両神郡の

郡司・百姓と神官司の庁との間にこの問題をめぐって交渉がくりかえされたあげくに、月次祭一カ月前のこの時点になって、神官の祠官たちが神託にこと寄せたこのような「奏」をなすに至ったものであろう、と説いているが、おそらく正しい見解であろう。岡田氏の説くように、当該記事のイセノオホカミの「奏」は、持統天皇の減税の影響で混乱を生じた神宮祭祀を無事に執り行うための神託であり、実際は伊勢神官の神託にことよせた天皇への奏上と思われる。

ただし、イセノオホカミが天皇に発した言葉を、「奏」という表記で記されていることに注意すべきである。「奏」は、天皇に申し上げること、またその上申文書のことであるから、従来説かれてきたような、イセノオホカミとアマテラスとを同一神ととらえる見解に納得できない記述である。

アマテラスが天皇に対して発した言葉は、『日本書紀』によれば「時に夜夢みらく、天照大神あまてらすおほかみ、天皇に訓をへまつりて曰たまはく、「朕われ今頭あたま八咫鳥を遣す。以て郷導者このをひきとしたまへ」とのたまふ。」（神武紀即位前紀戊午年六月）、<sup>13</sup>是こゝに、天照大神あまてらすおほかみ、誨をへまつりて曰たまはく、「我が荒魂あらかみたまをば、皇后おほきみに近くべからず。當まさに御心みこころを廣田國ひろたのくにに居らしむべし」とのたまふ。」（神

功紀撰政元年二月)の二例である。この「訓」と「誨」は、神や上位の人がさとし、導くことであり、臣下が天皇に申し上げる際につかう「奏」とは明らかにその意味が違う。また天皇ではないが、アマテラスが他の神や倭姫命に発した言葉にも、「詔」「勅」「誨」の言葉が使われており、すべてアマテラスが上位の立場から語っていることがわかる。

このようにイセノオホカミは、持統紀の当該記事において、アマテラスとは明らかに違って臣下の立場に置かれている。そのため各注釈書がこの記事について、伊勢神官が神の神託と称して天皇に申請したものと解釈していると思われる。

ところが、イセノオホカミとアマテラスを同じ神だとすれば、その神託は「奏」ではなく、「訓」か「誨」で記されるはずである。これは伊勢の太陽神がイセノオホカミからアマテラスに変遷する過程で、イセノオホカミはその靈格を失い、太陽神を祀る神官ないし一個の地方神として認識されるようになったからであると思われる。

また『古事記』によれば、皇女トヨスキイリビメに大神の御靈代を託して大和の笠縫邑に祀ったという『日本書紀』とは違って、トヨスキイリビメが「伊勢の大神の宮を拝き祭る」(『古事記』崇神天皇)と記されており、またヤマトヒ

メについても「伊勢の大神の宮を拝き祭る」(『古事記』垂仁天皇)と記すのみである。こうした伝承の相違からもアマテラスとイセノオホカミは別の太陽神とみるべきであろう。

アマテラスは天武紀の壬申の乱において再び登場する。『日本書紀』によれば、大海人皇子は壬申の乱の際にアマテラスを遙拝したという。「丙戌ひのえいぬひに、旦あしたに、朝明郡あさけのほりの迹太川とほかはの邊へにして、天照太神あまてらすおほみかみを望拜たよせにをがみたまふ。」(『日本書紀』天武天皇元年六月)

この時、大海人皇子が拝したのは、イセノオホカミではなく、アマテラスである。雄略天皇朝から用明天皇朝まで天皇家によつて特別に祀られてきたイセノオホカミが、アマテラスに転換されたのは、この天武天皇の時期であったと思われる。そのため、持統天皇の記事が示しているように、イセノオホカミは太陽神としての靈格を失い、神官ないし地方神の姿に変わっていったのである。

## 五

以上のように、元々伊勢の原始的な太陽神であったと思われる神は、サルタビゴ、イセツヒコ、そしてイセノオホカミである。

太陽神アマテラスの御魂の象徴、八咫鏡のような眼をもち、天地を照らしたというサルタビコは天孫降臨神話の中に登場し、ホノニギを降臨地まで案内してから、アメノウズメとともに伊勢に戻り身を隠す。これは、古く伊勢地方で祀られていた猿の太陽神サルタビコが、新しく浮上する太陽神アマテラスの子孫ホノニギに、太陽神の地位を明け渡して、伊勢に退去したことを意味する。また風土記に伝わるイセツヒコの退去の光景は、この神の神格が太陽神であったことを示している。そしてこの神が、アマテラスの直系子孫である神武天皇東征の際に退かれて伊勢を去ったという記述は、皇祖神アマテラスの登場につれて、伊勢の太陽神はアマテラスへと変わってゆくその過程を示しているといえよう。さらにイセノオホカミもまた、雄略天皇朝から用明天皇朝まで、伊勢の日神として天皇家の皇女によって祀られてきたが、天武天皇の頃にアマテラスへと変わっていった、神官ないし地方神として認識されるようになったのであろう。

このようにサルタビコ・イセツヒコ・イセノオホカミの伝承は、皇祖神アマテラスが登場する以前の伊勢地方の古い太陽神の存在を示している。また、これは皇祖神アマテラスが太陽神として東の太陽の聖地伊勢に鎮座するにつれ

て、その霊格を失い退去する伊勢の古い太陽神の伝承であり、いわば太陽神の交代を示す神話であると考えられる。ただイセノオホカミについては、今回中心として考察した『日本書紀』以外にも、『古語拾遺』や中古の書物にもその名が見え、紀伊国の日前国懸神との関わりと、中古のアマテラス像とともに視野に入れて考察を行う必要があると思われる。それについては今後の課題として、ひとまずこの論を閉じることにする。

#### 【注】

『古事記』『日本書紀』『風土記』は、『岩波日本古典文学大系』に拠る。

『延喜式』は、虎尾俊哉編『延喜式』集英社、二〇〇〇年に拠る。

(1) 津田左右吉『日本古典の研究 上』岩波書店、一九七二年。

(2) 直木孝次郎『日本古代の氏族と天皇』塙書房、一九六五年。

(3) 西郷信綱『古事記研究』未来社、一九七三年。

(4) 松前健『日本神話の新研究』桜楓社、一九七九年。

(5) 筑紫申真『アマテラスの誕生』講談社学術文庫、二〇〇二年。

(6) 鎌田東二『ウズメとサルタビコの神話学』大和書房、二〇〇〇年。

(7) 松前健、前掲書(4)。

(8) 松前健、前掲書(4)。

(9) 尔時皇太神倭姫命乃御夢諭給久。我高天原仁坐。甕戸押張。

原如見々志真伎志国宮処波是処也。鎮理定理給止覚給支。

于時倭姫命並御送駅使。安部武淳河別命。和珥彦国葺命。

中臣国摩大鹿島命。物部十千根命。大伴武日命。並度会大

幡主命等仁。御夢状具令教知給支。于時大幡主命悦白久。

神風伊勢国百船度会巢佐古久宇志呂治五十鈴河上。鎮理定

理坐皇太神止。国保伎奉支。終夜宴樂舞歌。如日小宮之儀志。

爰倭姫命。朝日來向国夕日來向国。浪音不聞国風音不聞国。

弓矢鞞音不聞国。打摩伎志壳留国。敷浪七保国之吉国。神

風伊勢国之百船度会巢之拆久志呂五十鈴宮尔。鎮理定理給

止。国保伎給支。

(倭姫命世記)

(10) 猿が神の使いとして広く信じられたことは、後世の記述でも確認できる。

・以猿使者登寸留事毛有口傳、異朝乃天台山乃神獼猴形也。(『廿二社本縁』日吉社事)

・一以三山王權現猿社體トシ玉事、神明ハ皆諸佛ノ心地、又ハ一切衆生ノ意識也、(中略)故ニ一切衆生ノ心法體ガ、

神明トモ顯ジ、猿トモ現ズル也、然間山王權現第一ノ使

者ニ猿、第二ノ使者鹿也、春日大明神第一ノ使者ハ鹿、第二ノ使者ハ猿也。(『嚴神抄』)

(11) 石原道博編訳『新訂魏志倭人伝他三篇』岩波文庫、一九九四年。

(12) 壬午に、過ぎます神郡、及び伊賀・伊勢・志摩の國造等に冠位を賜ひ、併て今年の調役を免し、復、供奉れる騎士・諸司の荷丁・行宮造れる丁の今年の調役を免して、天下に大赦す。

(『日本書紀』持統天皇六年三月十七日)

(13) 岡田精司『古代祭祀の史的研究』塙書房、一九九二年。

(14) 『令義解』公式・奉事式条に、「奉レ勅依レ奏。若更有勅語一須レ付者、各随レ状付云々」とある。

(15) ・爾に天照大御神詔りたまひしく、「然らば汝の心の清く明きは、何して知らむ。」とのりたまひき。(『古事記』宇氣比) ・是の時に、天照大神、勅して曰はく、「其の物根を原ぬれば、八坂瓊の五百箇の御統は、是吾が物なり。」

(『日本書紀』神代上、第六段本文)

・天照大神、倭姫命に誨へて曰はく

(『日本書紀』垂仁天皇二十五年三月)